

明確な目的をもった分掌横断の委員会で 教育改革に対応、その過程を説明会で発信

教育改革に対応する事業の 中間ゴールでもあった説明会

2017年10月、静岡県立焼津中央高校は、中学生、高校生、保護者から、中学校教員や塾関係者までを対象にした学校説明会を開催した。

告知ポスターに「なぜ中央は飛躍しているのか?」そして更なる飛躍に向けて:」と公立らしからぬ謳い文句を入れたその会の内容は、相当の充実ぶり。難関大学の現役合格者が体験を語り、彼らを指導した教師が躍進の要因を分析し、在校生も中学生向けにブレゼンし、最後にまた教師が、教育改革の流れとそれを受けての学校の取り組みを紹介した。

参加者は約300人。アンケートの記述では、学校や教育改革のことを理解できたという感想のほか、発表した先生たちへの称賛も目立った。

それは、教育改革が目指す「主体的・対話的な学び」を、その先生たちが体現中だったからかもしれない。

そもそも立案者の小関校長は、当初からこの説明会を「地域へのPR」と併せて「教育改革への対応準備」ミドル

リーダーの育成」を進める事業の、過程の一つ」と位置づけていた。いうなればプロジェクトの中間ゴール。それはどういうことを説明するには、2017年度春に発足した、ネオアドバンス委員会の話から始めなければならない。

若手の企画・運営を 管理職やベテランが支援

焼津中央高校では、生徒が勉強にも部活動にも熱心に取り組み、最近では進学実績も伸ばしていた。

だが、2017年度に同校に赴任した小関校長は危機感を抱いていた。「高大接続、新テスト導入、学習指導要領改訂といった今後の改革でもたらされる衝撃の大きさを感じていたからです。本校も地域の拠点校として、そこに対応するために変わらなければいけない部分が多い。ただ、先生たちは目の前の指導を必死にやっているわけですが、大きな波が来るから変えよう」と叫ぶだけでは「状態がいいのになぜ変える?」と思われて、うまくいきません」

ではどうするか。小関校長が取った路線は、順調だからこそ「この勢いを切

図1 学校説明会における教育改革のプレゼン資料

若手教員が「教育改革」「高大接続」「入試改革」について調査・議論・整理したうえでプレゼン資料にまとめ、そうした時代だからこそ自分たちが学校で取り組み出したアクティブラーニングの授業実践例と併せて、保護者に紹介。この活動を通して、若手教員の教育改革への理解は格段に深まり、「なぜこうした授業をやるのか」という裏付けがしっかりしたことで、自分たちの実践への自信も深まったという。

学校データ

1963年創立/学年制普通科/生徒数852人(男子397人・女子455人)/進路状況(2017年3月実績)大学247人・短大5人・専門学校10人・進学準備19人

「つちやいけない」と二層の前進を先生たちに呼びかけることだった。

具体的なアクションも起こす。重点目標に取り組み学校に予算がつく県

事業)に応募。「進学実績向上と、学習指導要領改訂・新テスト導入を見据えた指導体制構築」を目標に掲げた。そしてその指定事業を進めるチームとしてネオアドバンス委員会を設置、図2

2

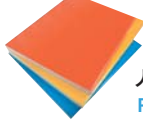


図2 ネオアドバンス委員会の位置づけ

1 目的

- (1)本校の進学への機運をさらに高め、実績の向上を図る。
- (2)より高い学力層の本校入学を図る。
- (3)「教育改革」への対応の準備をする。
- (4)(3)を通じて本校の課題を整理し、指導体制を整備する。

2 具体化の柱

- (1)生徒の進学意識を高めさせ、意欲を育むために、今春の大学合格者から直接学ぶ機会を設ける。
- (2)地域の中学生と保護者、中学校教諭等に本校の魅力と実績等について広く周知し、PRする企画を行う。
- (3)3年生希望者を対象とし、夏季以降における具体的な学習内容や方法、スケジュール等について学ぶ機会を設ける。
- (4)今後の指導要領改訂・新テスト導入等に対応するための準備として、先進実践例などの調査研究を通じて現状を整理し、指導体制の整備を図る。

3 組織等

- 校長 事業総括
- 教頭 企画調整及び指導関係
- 副校長 連絡調整及び報告関係
- 事務長 予算執行及び管理
- 【委員】 露木隆……山梨達也 計8名

※ミドルリーダー育成の観点から、若手・中堅職員を中心としたチームとする
※オブザーバーとして、進路指導主事・教務主任・研修主任・各学年主任に必要に応じて指導助言、事業実施への協力を依頼する

「地域への学校PR」は、進学実績向上や教育改革への対応を図るための1施策という位置付け。その学校説明会の開催を、近隣の中学校・塾を全部回って広報する地道な任務は、小間校長と清水教頭が担当。

保護者の声

先生たちが先を見据えながら
生徒に寄り添ってくれていて
安心した

- 校風がすごく伝わってきました。未来志向、先を見込んだ取り組みが良かった。
- 対応能力を高める学習方法、社会で活躍していく人間を育てる方向に向かっていると感じました。
- 新しい大学入試に向けて、すでに中央高校が取り組んでいることに驚き、安心して受験させたいと思いました。
- 教師陣がすごそう。ここまで何故変わったのか。
- 先生方の熱心さが伝わってきて安心しました。
- 生徒の気持ちに寄り添える教師や環境が、子どもの力を最大限にさせているのだと思いました。
- 先生たちが生徒のことを思ってくれていることがよくわかって素敵な学校だと思いました。
- 貴校に子どもをお任せしたいなと思いました。

先生方、高校全体で先を見据えてご尽力いただいても良い印象を受けました。



のように、何に取り組み組織かもはっきりと示した。

委員になった先生たちは、この方針の通り、教育改革の調査研究や対応準備を進めた。また、その進行中の取り組みからこれまでの実績も含めて、焼津中央高校の今を広く地域にPRするイベントも企画した。それが冒頭の学校説明会なのだ。

委員のチーム編成も独特だった。分掌横断で、20〜40代の若手で「やりた」という意思を示してくれた先生を抜擢。リーダーの露木先生は37歳、最若手の山梨先生は26歳だ。

校長がこうした編成にした理由は二つある。一つは、教育改革の情報収集から施策の打ち出し、周知徹底までを「進路課や教務課だけに任せるのは、負担が重いうえに、他の先生から理解が得られにくい」と考えたからだ。

もう一つは、「若い先生にとって教育改革はこの先ずっと直面していく問題で、危機感も強いはず」と考え、「彼らがいずれ学校を引っばっていきけるよう、ミドルリーダーの育成も兼ねたい」との思いがあったからだ。

主任クラスの先生にはオブザーバーとして支えてもらい、「委員会のやることに協力してくれ」とも伝えた。そのうえで小間校長と清水教頭が年間を通じて委員との対話を重ねた。

「委員の先生たちは、力はあるけれど、やはり若いので悩みもたくさん出るわけです。清水先生が常にそばでサポートし、校長室にも彼らが何度もきて、そのつど話し合いました。丸投げはダメ。密に関わり続ける覚悟がいると思います」(小間校長)

「私からは『失敗していいから自信をもつてやろう』と伝えていました。大変と

いうよりも、楽しかったですね。やる気に満ちて自信をもっていく先生たちを見られて嬉しかったです。地域の方々にも、焼津中央高校が「教育改革に向けて動いているな」と感じていただけました」(清水教頭)

**説明会を見据えた取り組みが
学校改革を進める原動力に**

若手の先生たちにも、委員会の活動は得がたい経験になったようだ。

「全国の先進校の視察をはじめ、教育改革の調査研究をしたことで自分たちの目指す方向に自信をもてるようになりました。『与えられるのを待つだけではダメだな』という思いも強まりました。若手とはいえ、教わるだけでなく、自分が知り得たことは他の先生方にも渡して、『お互いに学んでいく関係』を大事にしていきたいです」(山梨先生)

「僕らには『何かしなきゃ』という思いから、個々に実践していたことはあったんですね。でも自分たちで学校を動かせるとは思えず、ある意味くすぶっていません。そのおのりで動いていた教員が、まとまるきっかけをもらえたことで、議論すればあつという間に数時間経つほど盛り上がりつつあります。そんな僕らを、ベテランの先生方も応援してくださって。学校にうねりを生むような挑戦をさせてもらっている。すごくやりがいを感じています」(露木先生)

今後は、説明会という区切りに向けて皆で懸命に学んできたことや、意見をまとめてきたことを基に、体制整備をさらに進めたいという。

「同じ意志をもった仲間がいて、それを理解してくれる上の先生方がいる。学校を自分たちで『変えられる』と感じています」(露木先生)